安田女子大学紀要　40，99–111　2012.

ナコンラチャシマを巡る２人の英雄

――タオスラナリとアヌウォン――

山　下　明　博

The Hero and Heroine of Nakhon Ratchasima: Thao Suranarai and Anuvong

Akihiro Yamashita

は　じ　め　に

タイ王国（Kingdom of Thailand）の東北部に位置するナコンラチャシマ（Nakhon Ratchasima）は，タイ王国の国民にとっての英雄であるタオスラナリ（Thao Suranarai），ラオス人民共和国（Lao People's Democratic Republic）の国民にとっての英雄であるアヌウォン（Anuvong）王がそれぞれ活躍した場所である。

ラオ人（Lao）の国家であるヴィエンチャン（Vientiane）王国の国王でありながら，タイの属国に甘んじていたアヌウォン王は，ラオ人をタイ人（Thai）の支配から解き放ち，ラオ人の国家を統合するという夢を抱いていた。そして，その実現のため，1826年，メコン（Mekong）川左岸のヴィエンチャンから，メコン川右岸の東北タイへ兵を進め，その主要な都市を支配下に置くことに成功した。

しかし，占領したナコンラチャシマの副領主夫人モー（Mo）たちの抵抗と，タイがラオ人鎮圧のために送りこんだ軍により，ヴィエンチャンの軍は敗走し，王都ヴィエンチャンも破壊された。1828年には，アヌウォン王もタイの軍に捕えられ，タイの首都バンコク（Bangkok）へ移送中に死亡した。

タイのラマ３世は，モー夫人の功績に対し，タオスラナリという称号を授け，彼女は，ナコンラチャシマのみならず，タイ全土において，タイをラオ人の反乱から救った英雄として崇拝の対象とされている。また，アヌウォン王は，ラオスにおいて，ヴィエンチャン王国を繁栄させ，タイと戦った英雄として教科書に掲載されている。

本論文は，民族的にはラオ人であるナコンラチャシマの住民が，２人の英雄に対し抱く思いを，国民国家からの視点と，住民からの視点で明らかにする。そして，国民国家の構築を目指したタイが，少なくとも東北タイにおいては，タイ国民としてのアイデンティティ，地域に対するアイデンティティ，民族へのアイデンティティを，矛盾なく重層化することに成功したことを，２人の英雄に対する住民の思いから明らかにする。

Ⅰ. 東北タイとナコンラチャシマ

1. 東北タイ

最初に，2人の英雄が活躍したナコンラチャシマのある東北タイについて述べる。

東北タイは，イサン（Isan）地方とも呼ばれ，平均標高 100 m から 200 m のコラート（Korat）高原と呼ばれる台地を中心とする地域である。そこに住む人々の人口はタイ全人口の約3分の1，面積もタイ全面積の約3分の1に相当する。

東北タイに住む人々の中で，大多数を占めるのが，ラオ人である。中央タイのタイ人がうるち米を主食とするのに対し，ラオ人は，もち米を主食とする。また，東北タイの人々が母語とするラオ語は，タイ国内ではイサン語と名称を変えられているが，メコン川の対岸にあるラオス人民共和国の国語であるラオ語とほぼ同じ言語である。ただし，ナコンラチャシマ周辺の地域は，東北タイの中で，例外的にラオ語の話者が少なく，後述するコラート語を母語とする住民が多い地域である[1)]。

東北タイの農業の中心は稲作であり，その大部分は，不安定な降水に依存する天水田で行われている。そのため，収量が低く，かつ不安定であり，東北タイは，タイの中で最も貧しい地域とされてきた。

タイでは，中央タイに居住するタイ人が主流民族であり，タイ人が母語とするタイクラン（Thaiklang）語をもとに作られた標準タイ語が国語となっている。タイ語もラオ語も，共にタイ（Tai）諸語に分類される言語である。しかし，標準タイ語とラオ語はかなり異なることから，中央タイのタイ人は，東北タイのラオ人を蔑視したり，ラオ人に対する差別感情が残っていることも事実である[2)]。

2. ナコンラチャシマ

中央タイから見て，東北タイの玄関口に当たるのが，コラート高原南西部に位置するナコンラチャシマである。

現在，ナコンラチャシマに住んでいる人々は，民族的にはラオ人であり，ラオ人のチャオ・ファー・グム（Chao Fa Ngum）王によって建設されたラーンサーン（Lan Xang）王国の末裔である[3)]。1353年に成立した，百万頭の象を意味するラーンサーン王国は，現在のラオスと東北タイを統治するラオ人の王国であり，ナコンラチャシマ周辺にもラオ人が居住していた。

1656年に即位したタイ・アユタヤ（Ayutthaya）王朝のナーラーイ（Narai）王は，交易に力を入れ国力を増すとともに，コラート高原の南西部にあったコラートとセーマー（Sema）という2つの都市を統合し，ナコンラチャシマを建設した[4)]。この都市は，タイとラーンサーン王国の国境に位置する都市であり，コラート高原から侵入する敵に対する軍事拠点として機能させることを目的としていた。

これ以降，ナコンラチャシマの支配はタイ人が行い，住民はラオ人という状態が続いた。

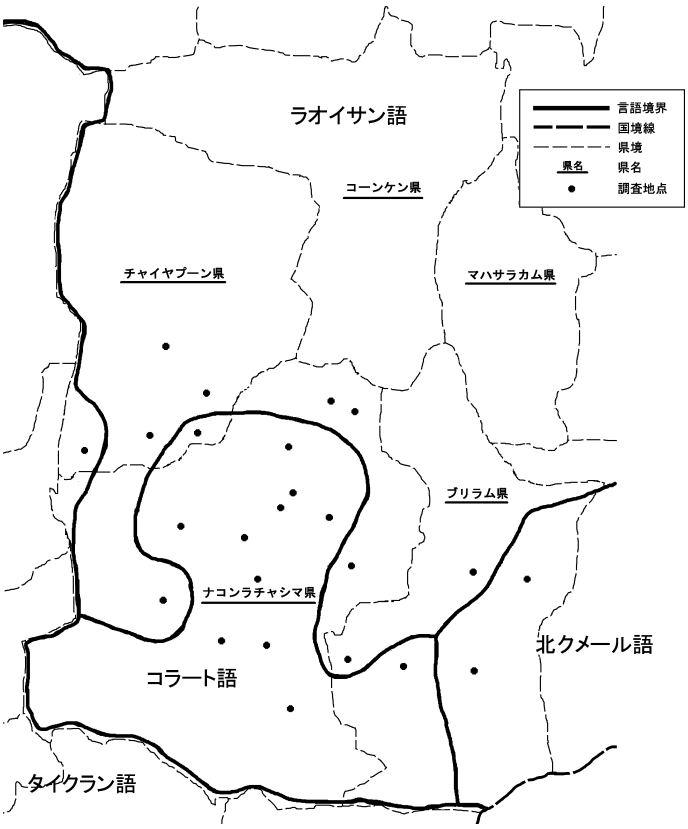
---

1) 山下明博（2002），「東北タイのコラート語に関する研究」，『安田女子大学紀要』，第30号，pp. 223–231参照。
2) 山下明博（2003），「東北タイにおける言語と帰属意識」，広島大学国際協力研究科博士論文参照。
3) 青山利勝（1995），『ラオス：インドシナ緩衝国家の肖像』，東京：中央公論社，pp. 192–194参照。
4) 上田曜子（2009），「ナコーンラーチャシーマー」，『タイ事典』（東京：めこん），pp. 291–292参照。

ラーンサーン王国は，1560年にヴィエンチャンに遷都し，17世紀には隆盛期を迎えた。しかし，18世紀初め，王位の後継問題により，ラーンサーン王国は，ルアンプラバン（Luang Phabang）王国，ヴィエンチャン王国，チャンパサック（Champasak）王国に分裂し，18世紀末には，３王国ともタイの属国になった。その結果，東北タイ全体においても，支配はタイ人，住民はラオ人という状態になった。

ナコンラチャシマに住む人々の多くは，コラート（Khorat）語を母語とする。コラート語は，コラートタイ語とも呼ばれ，タイクラン語と相互理解可能な言語であるため，これまでは，タイ人の母語であるタイクラン語の方言であると位置付けられてきた。そこで，筆者が言語認識に関する現地調査を行った結果，コラート語の使用地域の面積は，スモーリーが過去に推定した使用地域[5]の面積の約半分で，ナコンラチャシマ県に集中していることがわかった。図１に，筆者が調査したコラート語と他の言語との言語境界を示す。

また，コラート語が，タイクラン語の方言としては典型的ではない声調システムを持っていること，また，コラート語の起源が，発音体系から1650年頃のサコンナコン（Sakon Nakhon）で使



出典：筆者作成
図１　コラート語の言語境界

5）Smalley, William A.（1994）, Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand（Chicago & London, University of Chicago Press）参照。

われていたラオ語であると考えられる[6] ことなどから，コラート語は，もともとはラオ語であったが，発音システムを変化させ，タイクラン語からの語彙の借用を行い，最終的に，タイクラン語とは相互に理解可能ではあるが，タイクラン語とは異なる言語へと変化したものと考えられる。

3.　タイ人とラオ人の東北タイをめぐる争い

1238年頃，タイ人であるバーン・クランハオ（Bang Klang Tao）は，中央タイのスコータイ（Sukho Thai）に王国を建設した。これは，タイ人が現在のタイ国領内において国家を建設した最初のケースであった[7]。その後，スコータイよりさらにバンコク寄りのロッププリー（Lop Buri）も，クメールの支配を離れ独立した。

さらに，1351年には，ロッププリーよりも南のアユタヤに，タイ・アユタヤ王朝が成立した。そして，1352年，ウートーン王（Somdet Phrachao Uthong）がクメールを攻撃し勝利したことにより，中央タイにおけるタイ人の主権がほぼ確立された。

一方，ラオ人は，前述のように，1353年，チャオ・ファー・グムがラーンサーン王国を建国し，メコン川流域，およびコラート高原を支配したが，1707年から1713年にかけて，３つの小王国に分裂した。

この当時，東北タイのコラート高原は，権力の空白地帯となっており，そこへ，タイ人とラオ人という２つの民族が進出していっていた。その中でも，タイ・トンブリ（Thonburi）王朝は，積極的にコラート高原への勢力の伸張をはかり，1770年代末には，ヴィエンチャン王国とチャンパサック王国を朝貢国とした[8]。さらに1778年には，ヴィエンチャンを占領し，ついに３つの王国はタイ・トンブリ王朝の支配下に組み込まれた。

この結果，東北タイに居住していたラオ人は，完全にタイ人の支配下に入ることとなった。また，ラオスでの政治抗争が原因で，多くのラオ人が東北タイに多く移住した[9]。タイ人の支配下におかれたラオ人による反乱も何度か発生している。

1782年，タイではトンブリ王朝に変わり，チャクリ（Chakri）王朝が樹立された。チャクリ王朝は版図の拡大に努め，1800年頃には，現在のタイ，ラオス，カンボジアに相当する範囲を勢力圏とするまでに領土を拡張している。

19世紀後半，植民地を建設するためにインドシナ半島に進出したフランスは，タイ王朝に対し，1867年から1907年までの約40年間に，５回にわたる領土割譲の要求を認めさせた[10]。２回目までの要求により，フランスは，すでにヴェトナムとカンボジアを獲得し，仏領インドシナに併合していた。３回目の要求の際には，タイの国境はメコン川までであり，ラオスはフランス（France）のものであると主張し始めた。その根拠は，ヴェトナム（Vietnam）とカンボジア（Cambodia）は，伝統的にラオスに対して宗主権を行使していたが，ヴェトナムもカンボジアもフランスの支配下に入ったからには，ラオスは今やフランスの支配下にあるというものであった。そして1893

6）Brown, J. Marvin（1985）, From Ancient Thai to Modern Dialects: And Other Writings on Historical Thai Linguistics（Bangkok, White Lotus）, p. 189参照。
7）石井米雄・桜井由躬夫（編）（1985），「東南アジア世界の形成」，東京：講談社，p. 150参照。
8）小泉順子（1994），「バンコク朝と東北地方」，池端雪浦（編）（1994），『変わる東南アジア史像』，東京：山川出版社，p. 197参照。
9）重冨スパポン（1993），「タイに「先住民」がいないわけ」，『アジ研ニュース』，第14巻７号，p. 14参照。
10）赤木　攻（1991），「タイ国の「国境」確定：近代的主権国家の成立 過程」，矢野　暢（編）（1991），『東南アジアの国際関係』，東京：弘文堂，pp. 130–134参照。

年，タイの首都バンコクが位置するチャオプラヤ（Chao Phraya）川河口を砲艦２隻で封鎖し，その軍事力を背景に，フランスは現在のラオスを仏領インドシナに併合するフランス・タイ条約をタイとの間で締結した。これにより，メコン川がタイと仏領インドシナの国境線になり，ラオ人は，メコン川左岸（現在のラオス）とメコン河右岸（現在の東北タイ）に分断された。

Ⅱ．　アヌウォン王の戦いとタオスラナリ

アヌウォンは，ヴィエンチャン王国の最後の国王である。父は，シリブンニャサン王（Siribunyasan）であり，その三男である。シリブンニャサン王は，タイのウボン（Ubon）に侵攻した。そこで，タイのタクシン王は，後のラマ（Rama）１世であるチャオプラヤ・チャクリ（Chaophraya Chakri）に命じてヴィエンチャンを攻めさせた。その結果，1779年にヴィエンチャン王国がタイの属国となり，シリブンニャサン王はヴェトナムに逃れた。しかし，ヴィエンチャンに残っていた彼の子供であるアヌウォンら兄弟はバンコクに連行され，人質としてそこで生活することになった。

その後，シリブンニャサン王が亡くなると，タイは，長男のナンタセーン（Nanthasen）を国王に即位させた。しかし，長男は政治に長けていなかったため，タイは長男をバンコクに連れ戻し，次男インタウォン（Inthavong）を国王に，アヌウォンを副国王にした。

アヌウォンは，ラマ２世の要求に応じ，チェンセーン（Chiang Saen）へ何度も進軍し，タイをビルマの侵攻から守ったため，ラマ２世の寵愛を受けた。そして，1805年にインタウォン国王が亡くなると，ラマ２世の推挙により，アヌウォンがヴィエンチャンの王位についた。アヌウォン王の時代，ヴィエンチャンはインフラ整備が進み，寺院が多数建設されるなど，その黄金期を迎えた。

そのアヌウォン王は，その後，タイに対して戦いを挑むことになる。

彼がタイと戦おうと考えた理由は，以下の通りである。

国王に就任したラマ３世は，就任後すぐに，国内全域に対し，税収の確保を目的とする国政調査を命じた。それと同時に，コラート高原に住むラオ人の大半に対し，入れ墨を行うことを強制した。しかも，多くのラオ人が，タイの首都であるバンコクの建設のために徴用され，ラオ人の間には，タイに対する不満と憤りが募っていった。その後，ラマ３世はアヌウォン王の息子のラサウォン・ガウ（Raxavong Ngau）王子に，バンコク近くの運河と砦の造成を命じたが，それが首尾よく行われなかったために，タイ王室はガウ王子を叱責し侮辱的発言を行った。これに対し，ガウ王子もアヌウォン王も激しく憤った。

また，かつてタイをビルマの侵略から救ったタクシン王は，ラオ人の国家であったチャンパサック，ヴィエンチャンを服属させ，ルアンプラバンも帰順させた[11]が，その際に，ヴィエンチャンの住民をサラブリ（Saraburi）の近くに移住させた。アヌウォン王の姉妹，ラオ人ダンサーの一団，宮廷芸術家も，バンコクに居住させられていた。そこでアヌウォン王は，彼らラオ人がヴィエンチャンに帰国するための許可を申し出た。しかし，タイ王室は，歌手１人だけ帰還することを許可することを通告した[12]。このようなタイ王室の扱いに，アヌウォン王は激怒した。

また，この当時，タイとイギリスが，条約締結を巡り対立していた。そして，アヌウォン王統

11）　増田えりか（2009），「ナコーンラーチャシーマー」，『タイ事典』（東京：めこん），pp. 235–236参照。
12）　Stuart-Fox, The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline（Bangkok, White Lotus），p. 120参照。

治下でのヴィエンチャンは，財力も軍事力も高まっていた。そこで，アヌウォン王は，タイ・チャクリ王朝から独立を達成する機が熟したと判断して，戦いを挑むことを決断したと考えられる。

1826年，アヌウォン王は，タイ・チャクリ王朝の影響下から脱し，完全な独立を実現する計画を立てた。その作戦は，コラート高原の南部地域のラオ人をヴィエンチャンに帰還させること，そして，タイに移住させられたラオ人を帰還させて一つに統合し，反タイ連合を形成するというものであった。そこには，タイの首都バンコクを脅かそうという意図は存在しなかった。

アヌウォン王の第１優先順位は，タイの支配下にあるすべてのラオ人に対する権限を奪い返し，徴兵能力を高めることであった。これを実現するためには，タイの首都バンコクに近く，タイの軍事的要衝であるナコンラチャシマに駐屯するタイ軍を破り，コラート台地を支配下に置く必要があった。そこが手に入れば，サラブリや中央タイにいるラオ人を帰還させることが可能であった。

そこで，アヌウォン王は，軍を４つに分け，ナコンラチャシマ，スワンナプーム（Suvannaphum），ウボンをはじめとしたコラート高原の主要な都市を攻略し，コラート高原のすべてのラオ人をかき集めてヴィエンチャンのある北へ引き揚げ，残された都市には火を放つという計画を立てた。そして，この計画が成功すれば，同じラオ人の国家であるルアンプラバン王国や，タイの属国となったチェンマイ（Chiang Mai）王国も，ヴィエンチャンに味方するものと期待しており，また，既成事実を作ることにより，かつてのラオ人の国家ラーンサーン王国の版図を再構築する時間を稼ぐことができると考えていた。

結局，この計画は，いくつかの偶発的な要素，そして，重大な誤算により頓挫してしまう。まず，アヌゥオン王は，タイとヴィエンチャンの人口の違いと，それに伴う兵力の違いを十分に計算していなかった。その当時，タイ人の人口は約500万人であったのに対し，タイ人以外の人口は，多く見積もっても15万人程度であった。

また，タイは，1822年と1823年に，イギリス製の武器を大量に購入していた。それに対し，ラオ人の武装は貧弱であった。

アヌウォン王の作戦は，1826年の12月半ばに開始された。第１軍である弟のウパラート・ティサ（Uparat Tissa）は，10,000人の兵力を率いてカラシン（Kalasin）へ向かった。第２軍であるアヌウォン王自身は，それ以上の兵力でナコンラチャシマへ向かい，1827年１月半ばにはそこを射程に収めた。その当時，ナコンラチャシマを治めていた領主は，カンボジアのクカン（Khukan）の領主の兄弟喧嘩による内紛を調停するために，カンボジア方面の作戦に参加しており留守であった。そのため，ナコンラチャシマには兵力がなく，アヌウォン王の先遣隊は無抵抗で入城できた。そして，1827年２月17日には，アヌウォン王の約８万人の軍が到着し，ナコンラチャシマは陥落した。

第３軍であるガウ王子は，少数ではあるが機動力のある兵力を率い，ラオ人をサラブリから北へ退かせる前に，ロムサック（Lomsak）やチャイヤプーン（Chaiyaphum）でラオ人の兵の補充を行った。そして，アヌウォン王の息子であり，チャンパサック王国の国王であるチャオ・ニョー（Chao Nyo）は，第４軍としてチャンパサックから出発し，ウボンを攻略するために西へ向った。

アヌウォン王は，タイ王室のラマ３世に対し，自分が軍をナコンラチャシマに進めるのは，ビルマ＝イギリス軍に対する攻撃に参加するためであるという偽の手紙を送った。その手紙の日付は1827年１月15日になっており，その８日後に，手紙はラマ３世の手元に届いた。第３軍のガウ王子が，サラブリからすべてのラオ人を北へ退かせる前日のことであった。

しかし，タイ王室は，既にラオの計画を知っていた。また，アヌウォン王がバンコクに進軍する意図がないことも知っていた。アヌウォン王は，ラオ人をぞんざいに扱ってきたナコンラチャシマ領主を捕まえようと３月20日までの５週間，ナコンラチャシマに留まり，貴重な時間を浪費してしまった。その間に，タイは大軍を編成し終えることができた。

さらに西では，第１軍のティサと第４軍のニョーが，迅速に兵を動かしていた。第１軍のティサは，ヤソートン（Yasothon）とスワンナプーム（Suwannaphum）を攻略するために南進した。そして，第４軍のニョーは，シーサケット（Sisaket）に進んだ。彼らに課された命令は，入れ墨を入れられたラオ人の農民から，紛れ込んでいるタイ人を排除し，ラオ人を北に引き上げさせることであった。しかし，その命令は遅々として進まなかった。それは，各地の戦闘から逃げてきた避難民が膨れ上がっていたからである。北へ引き揚げる際に，ラオ人は，タイ人，クメール（Khmer）人，中国人と分けられた。しかし，アヌウォン王は，愚かにも，タイ人，クメール人，中国人の避難民と，２人の年老いたタイ人役人が同行することを許可してしまった。そしてそのグループによる反乱が計画された。

ここで登場するのが，後にタオスラナリの称号を与えられる，ナコンラチャシマ副領主の妻であるモー夫人である。ラオ兵に捕らえられたモーら女性・老兵などは，捕虜としてビエンチャンに移送されることとなった。連行されるモー夫人ら捕虜は，ラオ軍監視兵らの食事の用意をさせられたり，占領した地域から収奪した物資の運搬役をやらされていた。そこで彼女達は，食事の用意のためにといって，ラオ軍から牛刀を借りたり，牛車の車輪を修理するためにといって金槌や鉄槌などを借り，隠れて木を削って槍や刀などの武器を作り始めた。1827年３月23日，捕虜たちはナコンラチャシマから40キロメートルほどに位置するピマーイ（Phimai）のサムリット（Samrit）平原にたどり着き，宿泊した。

モー夫人らは一計を案じた。夕食時に酒のすすむご馳走を作り，ラオ軍将兵を酔い潰した上で，包丁や，作り置いた槍や刀などの武器を使って襲いかかり，多くの将兵を殺し，武器を奪って逃げ出した。ルア（Lua）という娘は，牛車に積んであった火薬に点火し，監視兵の指揮官と共に爆死した。

その後，モー夫人らは，住民を指揮してピマーイ遺跡に砦を築き，ラオ軍に備えた。すると，近隣で戦い散り散りになっていた兵たちも砦に集結し，そこで，バンコクからタイ軍が到着するまでラオ軍に抗戦した。

逃げ出せたラオ人の監視兵がその惨事を報告した。その後，偵察のために送られた50人のラオ兵も待ち伏せされ，殺された。そこで，3,000人の兵士を送ったものの，抵抗が余りにも熾烈であったため，ラオ人の指揮官は，ナコンラチャシマ領主が，クメール方面の作戦に参加した兵を避難民に紛れ込ませていると考え，命令の遂行をあきらめた。

アヌウォン王が，ナコンラチャシマ支配に失敗した原因は，アヌウォン王がタイ軍の強さと動きについて無知であったこと，そして，自分の軍へラオ人を徴兵することが十分に行えなかったことである。

態勢を整えたタイ軍の指揮官チャオプラヤ・ボディン（Chao Phraya Bodin）は，軍を３つに分けてヴィエンチャン攻略を行うことにした。第１軍は，イギリスの攻撃に備えてバンコクに残し，第２軍は，サラブリ経由でナコンラチャシマを目指した。さらに，第３軍は，ラオ軍の西側を目指し，パサック（Pasak）渓谷に沿ってロムサックへ進んだ。そして第２軍は，ナコンラチャシマを奪回した後，さらに二手に分かれ，主力は北へ向かってアヌウォン王を追撃し，残りは，

コラート高原南部を東に進み，チャンパサックを奪回，ニョーを捕えた。そして，北へ逃れるティサの軍を追ってスワンナプームへ進んだ。

一方，ガウ王子は，西から攻めるタイ軍をロムサックで食い止めていた。アヌウォン王は，ビエンチャンの南 80 km のノンブアランプー（Nong Bua Lamphu）まで北上した。彼は，避難者の数の多さに邪魔されており，さらに，残された都市に火を放つという計画は実行されないままであった。そのため，後を追ってきたタイ軍は，都市に残された食料をそのまま確保することができた。

1827年 5 月中旬，ラオ軍は，ノンブアランプーに第 1 防衛線を引いたものの，第 2 防衛線へと後退を余儀なくされた。ラオ軍の敗走で，ヴィエンチャンの防衛が不可能であると悟ったアヌウォン王は，家族とともに，船でヴェトナムに逃れた。タイ軍は，ヴィエンチャンを 5 日で陥落させ，王室は略奪され，火が放たれた。仏像は没収され，ラマ 3 世の「反乱を起こした者が償うべき代償の範とせよ」との命令に従い，ヴィエンチャンは完全に破壊され，指導者の家族たちは捕えられた。

ヴィエンチャンの陥落とアヌウォン王の逃亡は，北タイのチェンマイ，ランパン（Lampang），ランプーン（Lamphun），ナーン（Nan），プエ（Phrae），ルアンプラバンの 6 つのラオ人王国の国王を，タイへ帰順させるのに十分な事実であった。属国としてタイから支配される状況から脱したいという思いはあったと思われるが，アヌウォン王を支援するという危険を冒そうとする王国は存在しなかった。同様に，コラート高原の中部や南部で，タイにより領主としての地位を与えられたラオ人の指導者たちも同様の考えであった。

数千人の兵は，戦闘から逃れるためにジャングルに散った。食糧貯蔵庫が破壊され，新たな作物の植え付けがされなかったため，1827年の半ばまでに，ヴィエンチャンを食糧不足と飢饉が恐ろしい規模で襲った。また，数万人のラオ人がバンコク近郊へ移住させられた。

1828年 2 月，タイ軍指揮官のボディンはバンコクに帰還したが，ラマ 3 世は満足していなかった。アヌウォン王が捕まっていなかったからである。タイ王室は，ヴェトナムの干渉を恐れていた。ボディンは，ヴィエンチャンに戻り戦闘を続けた。

その間に，アヌウォン王は，ヴェトナムのミン・マン（Minh Mang）王が与えた100人のヴェトナム兵を含む1, 000人程度の兵とともに，ヴィエンチャンに戻った。その後の動向は諸説あるが，最終的には，1828年，アヌウォン王とその一族はタイ兵に捕えられ，檻に入れられてバンコクに移送される途中亡くなった。そして，ルアンプラバンなど，残ったラオ人勢力は，完全にタイの服属国となった[13)]。

図 2 に，1827～1828年のラオ・タイ戦争における両軍の軌跡を示す[14)]。

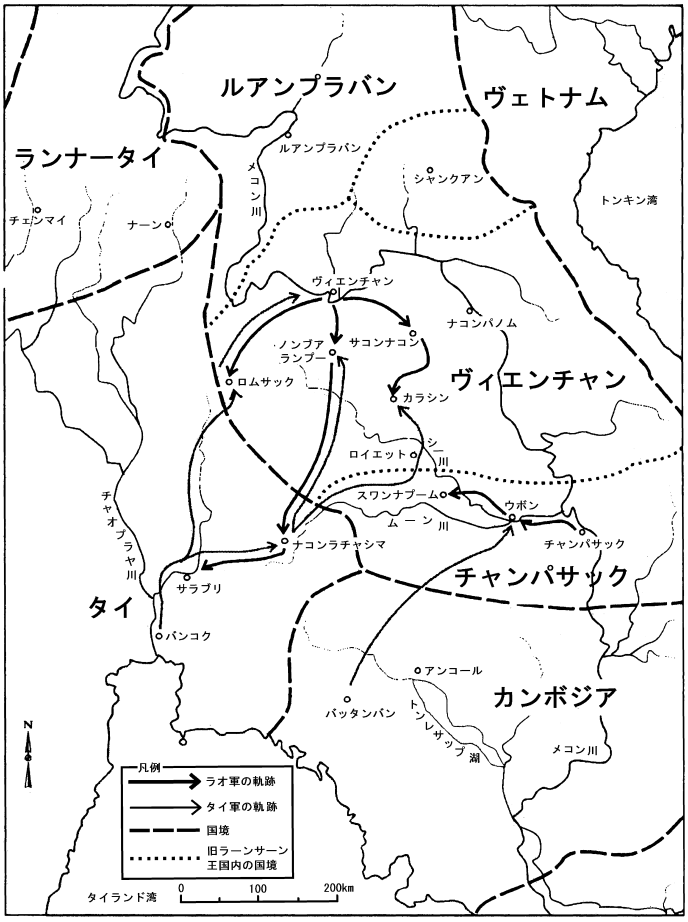
Ⅲ.　国民国家の視点から見た英雄

1.　ラオスの英雄としてのアヌウォン王

ここでは，なぜアヌウォン王がラオスの英雄とされるかについて述べる。

アヌウォン王は，かつてラオスと東北タイを支配下に収めていたラーンサーン王国のように，ラオ人の住む東北タイをタイ人による支配から解放し，ラオ人による国家を統一しようという志

13）　桜井由躬雄（2002），「東南アジアの歴史」，東京：NHK 出版，p. 181参照。
14）　前掲書　12）p. 124参照。



出典：The Lao Kingdom of Lan Xang: Risa and Decline p. 124より著者作成
図２　1827～1828年のラオ・タイ戦争

を持って進軍した。そして，ラオ人が，コラート高原の各都市を攻略し，ナコンラチャシマの市内の城砦も占領した。これにより，東北タイにおいて，ラオ人がタイ人の支配を打破することに成功した。

しかしながら，この戦いにアヌウォン王は敗れ，東北タイのタイ・チャクリ王朝からの解放，そして，ラオ人による統一国家の建設は失敗した。また，この戦いの後，ヴィエンチャン王国も力を失い，東北タイもタイ人に完全に支配されることになった。

ラオスは，ラオ人による国民国家を標榜している。そして，ラオ人による国民国家の出発点が，ラオ人であるファーグム王が樹立した，ラーンサーン王国である。それは，ラオスの教科書に，東北タイはかつてラオスを中心としたラーンサーン王国の領域であったとして，東北地方までを含めた歴史地図が描かれ，国民国家の教育が行なわれている[15]ことからもわかる。

15）飯島明子（2004），「タイ人はここにいた？「タイ国史」の歩み」，綾部恒雄・林　行夫（編）（2004），『タイを知るための60章』（東京：明石書店），p. 17参照。

そして，アヌウォン王は，ラオ人のために，支配者であったタイ人と戦った英雄として教科書に登場する。ラオスが，東北タイもラオ人の国民国家の一部であったことを国民に対して訴えるという意味で，アヌウォン王は，崇拝されるべき英雄であるとされている。

2.　タイの英雄としてのタオスラナリ

次に，なぜタオスラナリがタイの英雄とされるかについて述べる。

アヌウォン王がナコンラチャシマの市内の城砦を占領した際，捕えられたモー達が，ヴィエンチャンへ連行される途中で，ラオの将兵を酔い潰して襲撃し，ピマーイ遺跡に築いた砦で，タイの軍が到着するまでの間，ラオ軍に抗戦し続けたことが，アヌウォン王敗走のきっかけとなった。

ナコンラチャシマの城砦があった，旧市街西側正門であるチュンポン門の前に，1934年，タオスラナリの銅像が建立された。タオスラナリは住民の尊敬の対象であり，この像の近くを通行する人々は，小学生から大人まで，みな像に手を合せる。また，毎年３月23日から４月10日にかけて，彼女の偉業を称えるために，タオスラナリ祭りが盛大に催される。

また，現在のタイの小学生向けの生活の教科書には，タイが現在のカンボジアやラオスまで統治していたこと，そして，モーが，ラオ人の王のバンコク攻略をナコンラチャシマで阻止し，ラマ３世からタオスラナリの称号を贈られたという話が記述されている。

タイは，タイ国民による国民国家を標榜しており，その出発点は，タイ，ラオス，カンボジアまで統治していた時代の国家の領域を指していた[16)]。

タオスラナリは，タイにとって，東北タイがタイ人の国民国家の一部であることを国民に対して訴えるという意味で，崇拝されるべき英雄であるとされている。

Ⅳ.　ナコンラチャシマ住民から見た２人の英雄

ここでは，ナコンラチャシマの住民の視点から，２人の英雄を考察する。

ナコンラチャシマの住民の大多数は，コラート語を母語とするコラート人を自称するが，民族的にはラオ人である。支配者であるタイ人は，タイクラン語を話す。しかし，解放者であるラオ人は，自分たちと同じラオ語を話す。タイクラン語は理解できないが，ラオ語は理解できる。解放者は，顔だちも食文化も習慣も同じラオ人である。

タイ人の国家であるタイ王国側から見れば，アヌウォン王の行動は，属国による反乱であり，鎮圧すべき行動であった。一方，ラオ人の国家であるヴィエンチャン王国側から見れば，アヌウォン王の行動は，東北タイをタイ人の支配から解放し，ラオ人の手に取り戻すという正義を実現する行動であった。

現在は，タオスラナリを崇拝するナコンラチャシマの住民であるが，約200年前のナコンラチャシマの住民の目には，アヌウォン王とタオスラナリの相反する行動は，どのように映り，彼らはどのように行動したのであろうか。

客観的に比較すると，タイとヴィエンチャンの人口の違い，そして，それに伴う兵力の違いは決定的であり，また，西欧の武器を購入して近代化したタイの軍の装備と，貧弱で旧式のラオの軍の武装とでは雲泥の違いがある以上，まともに戦っては，アヌウォン王の勝機はほとんど存在

16）　前掲書　14）p. 17参照。

しなかった。しかし，当時，ナコンラチャシマの住民はそのことを十分知らなかった。また，ラマ３世が，コラート高原に住むラオ人の大半に対し入れ墨を強制したり，多くのラオ人を，タイの首都バンコクの建設のために徴用したりしたために，ラオ人の間にタイに対する不満と憤りが募っていた。これらのことから，ラオ人の解放者であるアヌウォンの行動に共鳴するものも多かったと考えられる。

また，当時のタオスラナリの活躍を否定する論文も，タイ人の手によって書かれたことがある。

教員のサイピン・ケーンガムプラサート（Saipin Kaewngamprasert）は，1995年に，「タオスラナリ」という題名の修士論文を書いた。その内容は，ラマ３世の時代にタオスラナリが存在したことを示す証拠はないというものであり，タオスラナリへの信仰と崇拝が，東北タイの人々のタイ政府への忠誠心を増すために，タイ政府によって作られたものであるというものであった。タオスラナリは，ラマ３世の時代にナコンラチャシマで起こったラオ人の反乱の鎮圧に貢献した女傑とされ，1933年にタイ政府の手によって銅像が建立されたが，これは，王党派のボウォラデート（Boworadet）がナコンラチャシマで反乱を起こし，ナコンラチャシマに「反乱」都市という悪名が加わった直後のことであったという。

そして，彼女の論文では，ラマ３世の時代にタオスラナリが存在したことを示す証拠はなく，1960年頃までタイ政府は東北タイの人々の忠誠心に疑念を抱いていたが，タオスラナリへの信仰と崇拝は，東北タイの人々のタイ政府への忠誠心を増すためにタイ政府によって作られたものであるというものであった。

この論文は，東北タイの人々を侮辱していると受け取られた。そして，デモや彼女の論文に対する焚書が行われ，彼女は，タオスラナリの銅像に向かって謝罪をさせられた。また，彼女は修士を剥奪され，彼女の執筆した本は回収され，彼女は公の場から姿を隠した。そして，ナコンラチャシマの学校から，他県の学校へと異動になるという騒動になった。

このことは，タオスラナリへの崇拝と信仰が，ナコンラチャシマの住民にとってすでに疑う余地のない絶対的なものになっており，タオスラナリの存在に疑問を抱くということが許されないほどになっていることを示している。

また，2001年に，タイでは，「スリヨタイ（Suriyothai）」という映画が公開され，タイにおける過去最高の興行成績を上げた。これは，ビルマの侵攻を，タイ・アユタヤ王朝のチャクラパット（Chakkraphat）王が迎え撃つという物語である。その中で，戦象に乗った王妃スリヨタイは，夫を救うために槍を振り回して戦うが，敵の手にかかって命を落としてしまう。この映画を通じて，彼女の勇姿は，「タイ王国と夫のために命を捧げた英雄」として，タイ国民の心にしっかりと刻み込まれた。

このスリヨタイと同様に，国家的なヒロインとして，タオスラナリの映画化も計画された。しかし，こちらは，ラオス政府の反対により，ついに実現することはなかった。スリヨタイもタオスラナリも，どちらもタイを救ったヒロインであるが，タオスラナリは，ラオスから見ると，アヌウォン王の正義の行動を妨害した人物である。タオスラナリの物語がタイ人の手によって映画化されれば，タオスラナリは英雄として描かれ，アヌウォン王は反乱を起こし最後は敗れ去る悪役として描かれる可能性が高い。それは，アヌウォン王を英雄として教育しているラオスにとっては受け入れがたいことであった。

ナコンラチャシマを巡る２人の英雄については，タイとラオスとの間で，未だ慎重に扱わざるを得ない問題であることを指摘したい。

V. ナコンラチャシマ住民の抱くアイデンティティ

タイは，卓越した外交能力に依り，アジアの中で，西洋列強の植民地にならず独立を維持した数少ない国のひとつである。

しかし，タイは，王国が直接的，あるいは間接的に支配していた地域のうち，約半分を割譲するという大きな犠牲を払い，ようやく現有の領地を維持することができた。

しかも，タイは，無条件に領地を割譲したわけではない。西洋列強の要求に対し，武力で解決するだけの実力がないことを熟知しており，前述のように，話し合いによる解決を重視していた。フランスは，タイに対し，19世紀後半に領土割譲の要求を行う際に，「ラオ人の住むラオスはフランスのものである」と主張していた。フランスから，同じ論理を使って，ラオ人が住んでいる東北タイも割譲するよう要求されないようにするためには，東北タイに，タイ政府の影響を十分に及ぼす必要があった。

そこで，1880年代，タイ政府は，東北タイに総督を派遣し，東北タイの住民に対する直接統治を強化し始めた。そして，東北タイのラオ人にタイ国民としてのアイデンティティを浸透させ，同化することによって，東北タイをタイ王国の実質的支配下に置こうとした。その基礎となったのが，ラマ５世の治世下に起源をもつ，民族，宗教，国王への三位一体的忠誠というイデオロギーである。その内容は，民族には仏教徒でありタイ語（Thai）を話すタイ（Thai）民族を，宗教にはタイ人の伝統宗教である上座部仏教を，国王にはタイ人の仏教コミュニティを守る王を位置付け，それらに対して，タイ国民は絶対的忠誠を誓うというものである[17)]。このイデオロギーは，後にタイの原理という意味の「ラック・タイ（Lak Thai）」とも呼ばれるようになり，タイ国民への教化が図られた。その結果，東北タイのラオ人も，タイ人と同じタイ民族と考えられるようになった。

そして，1939年，ピブンが「ラッタニヨム（国家信条）」運動を展開した後は，タイ国民としてのアイデンティティをさらに強化する動きが強まった。

これと並行して，ラオ人としての民族的アイデンティティに代わり，東北タイ・イサン地方のイサン人という地域的アイデンティティを植え付ける試みが行われた。イサンという言葉には，東北という意味はあっても，ラオという意味は含まれていない。19世紀，東北タイに行政区が設置される前は，東北タイに，ファムアング・ラオ・プアンやファムアング・ラオ・ガオという地域名が存在した。これらは，そこが異民族ラオ人の地方であったことを意味する。そして，タイ政府は，ラオという言葉を行政上排除するため，これらの地域名を，モントン・ウドンやモントン・イサーンに改称した。これは，東北タイが，はっきりと「バンコクから見た東北」に位置づけられ，民族的差異を少なくとも行政的には意識的に排除しようとしたことを意味する[18)]。

その結果，東北タイのラオ人は，タイ国民（国民），イサン人（地域），ラオ人（民族）と重層化したアイデンティティを保持することになった。また，民族的アイデンティティを地域的アイデンティティに変容させることも行われた。

17） 小野澤正喜（1996），「東北タイのラオス・ベトナム系カトリック教徒におけるエスニシティ：『出仏国記』と七人の殉教者崇拝に見られるアイデンティティの活性化過程」，綾部恒雄（編），『国家の中の民族：東南アジアのエスニシティ』，東京：明石書店，p. 91参照。

18） 福井捷朗（1988），『ドンデン村：東北タイの農業生態』，東京：創文社，p. 53参照。

結　　論

本論文では，タイ王国の国民にとっての英雄であるタオスラナリ，ラオス人民共和国の国民にとっての英雄であるアヌウォン王が，ナコンラチャシマで実際にどのように活動したかを詳述した。そして，タオスラナリがタイ王国において崇拝される理由は，東北タイがタイ人の国民国家の一部であることを国民に対して訴えるためであり，アヌウォン王がラオス人民共和国において崇拝される理由は，東北タイもラオ人の国民国家の一部であったことを国民に対して訴えるためであると考えた。

ナコンラチャシマの住民は，民族的にはラオ人である。彼らにとって，200年前であれば，２人の英雄のうち，支配者であるタイ人から，自分たちラオ人を解放するためにやってきたアヌウォン王の方に肩入れする人数が多かったかもしれない。

しかし，現在であれば，ナコンラチャシマの住民のほぼ全員が，２人の英雄のうち，ラオ人の軍に抵抗したタイの英雄に肩入れするであろう。

それは，タイという国家が，フランスなどの西欧列強からの外圧を受け，国民国家を構築するために行った東北タイに対する施策，すなわち，ラオ人という民族のアイデンティティを希薄化させ，タイ国民としてのアイデンティティを強化するという施策が，ナコンラチャシマの住民を変化させたことを意味している。

また，タオスラナリは作られた英雄であったという論文が，東北タイの人々を侮辱していると受け取られるほど，タオスラナリへの崇拝と信仰は絶対的なものになっている。

筆者は，国民国家の構築を目指したタイは，少なくとも東北タイにおいては，タイ国民としてのアイデンティティ，地域に対するアイデンティティ，民族へのアイデンティティを，矛盾なく重層化することに成功したと考える。また，民族へのアイデンティティを希薄化し，地域に対するアイデンティティへと変容させることができた理由の一つが，タオスラナリへの崇拝と信仰の強固さであると考える。

もちろん，タイは，南部タイのムスリムを国民として統合する過程で，宗教的アイデンティティの扱いに苦労してきた。また，現在は，国民が，政治的にタクシン派と反タクシン派に２極分化した[19]ため，政治的アイデンティティの統合ができず，社会不安を招いている。

これらの問題を解決する糸口は，東北タイで成功した，いくつかのアイデンティティを変容させ，複数のアイデンティティを矛盾なく重層化する施策にあると考える。アイデンティティの重層化について，今後も研究を続けたい。

〔2011．９．29　受理〕

19）　山下明博（2010），「世界遺産をめぐる国境紛争の原因」，『広島平和科学』，第32号，pp. 57–81参照。